

そしてその龍宮世界が、三谷栄一(前掲論文)が指摘するよう四方に四季を配する、いわば時間を統括する場所として古代以来とらえられてきたことから、陰陽道「神話」における龍宮は時間を見渡す場所として設定されており、暦の根源の空間とでもいえるべきものであることが見通せる。だとすると陰陽道の「神話」における龍宮への執拗な意識や言及は、時間秩序が生み出される場所としての龍宮の重要性をくり返し表現、強調しようとしたものであると理解することができる。

これが時間意識の表出の形態が先行するのか、古代以来の常世や龍宮への意識がこうした時間表現を引き寄せたものか、については他の神話や説話を材料として引き続き検討を加えるべきであろう。

〈殺す神〉としての須佐之男命について

小 濱 歩

『古事記』における須佐之男命は、暴力的に振る舞い、様々な混乱を引き起こす存在として描かれている。また、出雲降臨以前と以後とで、その性格を異にするかに見える点もしばしば不審とされてきた。しかし、〈殺害〉を通して新たな秩序形成への転換を促す働きを見て取ることができる点で、同神の事跡には一定の共通性を見て取ることができる。

具体的な検討の対象として、(1)伊耶那岐命から委任された海原の統治を放棄して泣き続け、青山を枯山になし、河海を泣き

干したこと、(2)高天原において「勝ちさび」に様々な乱暴を働き、天服織女を殺害すること、(3)祓を科されて高天原から追放された後、大宜津比売を殺害すること、(4)出雲に降臨して八咫大蛇を退治すること、(5)根之堅州国を訪れた大穴牟遲神に過酷な試練を課したこと、以上五つの事跡を取り上げるならば、それぞれについて以下のことを指摘できる。

すなわち、(1)は地上世界の荒廃をもたらし、遂に伊耶那岐命によって追放されるが、このことは伊耶那岐命が依さした三貴子の分治体制を否定するとともに、新たな世界秩序への模索へと繋がってゆく、(2)高天原の秩序をいったん崩壊せしめ、天照大御神の石屋戸隠りを引き起こすが、それがむしろ天照大御神の再生による高天原秩序の更新と、三種の神器の鏡・玉を整える契機ともなる、(3)女神の殺害が五穀の発生と農耕の開始という生産的事態へと接続し、また神産巢日神の五穀の種の採取が、その子少名毘古那神の大国主神への協力というかたちで、葦原中国の国作りに寄与する、(4)八岐大蛇退治は葦原中国開拓の第一歩であるとともに、その尾から獲得した草薙剣を天照大御神に献上することは、三種の神器の剣を整え、国譲りの伏線ともなる、(5)大穴牟遲神に対して生命を脅かすような試練を繰り返す課すが、これは成年式儀礼における擬死再生の観念を背後に有し、結果大穴牟遲神は大国主神へと成長して葦原中国の国作りを開始する。

このように、須佐之男命は暴力的・破壊的に振る舞っているかに見えて、しかし、その行動は常に何らかの新しい秩序の創出(旧秩序の否定と更新)の契機となっており、それが見て取れ

る。この点は出雲降臨の前後で一貫している。また、大宜津比売・大穴牟遲神の事例に典型的に見て取れるように、須佐之男命は〈暴力〉を介して〈変身〉を強いる神でもある。この神は常に〈変身〉もしくは〈更新〉の〈触媒〉として働くのであり、この神自体が何らかの固定的な〈価値〉や〈秩序〉を主張・体現・確立する傾向は乏しい。

従来、『古事記』の須佐之男命の神格・神性を考察する論考の多くで、「高天原／出雲」「善／悪」「正／負」「秩序／混沌」等の二項対立を設定し、須佐之男命を後者の側として位置づけることが行われてきた。しかし、右に指摘した諸点からは、『古事記』の須佐之男命を単なる「破壊の神」「負の価値を体する神」と規定する見方が一面的なものであることが改めて知られる。『古事記』の須佐之男命は破壊的な性質を確かに有するが、それは単に破壊のみに留まる性質のものではないと言える。破壊的行為と見えるものが、その行為を通して、事態の転換や殺害対象の〈変身〉をもたらし、それによって世界秩序の更新・形成が進んでゆくような、建設的な存在としても捉えうるのである。

須佐之男命はこのように二重性を有した神であり、少なくとも『古事記』においては、「善／悪」「正／負」「秩序／混沌」の二項対立を単純に設定した上で、須佐之男命を「悪」「負」「混沌」を体する神として一義的に位置づけることは、必ずしも相応しくないと見えよう。また、この点において『古事記』の須佐之男命に関するテキストは、『日本書紀』のそれと比較して、ひとつの特色を成していると言えよう。

北畠親房における祭政一致説の意義

齋藤 公太

「祭政一致」は近世において様々な思想家に取り上げられ、近代の国家神道にも関係する概念であるが、祭政一致説を最初に提唱したのは南北朝時代の北畠親房であると言われている。記紀等の記述を顧みれば、古代社会において政治の中心が祭祀であったことが推測され、また祭祀と政治の相関関係を説く思想は伊勢神道等にも見出される。だが、「祭」と「政」の字訓が同一であることに着目して祭政一致を説いたのは、確かに北畠親房が最初であつたろう。親房の『神皇正統記』には「上古ハ神ト皇ト一ニマシマシシカバ、祭ヲツカサドルハ即政ヲトレル也(政ノ字ノ訓ニテモ知ルベシ)」という記述があり、『職原鈔』にも同様の記述が見られるからである。

もともと先行研究では祭政一致論の源流が親房にあることを指摘するにとどまり、その言説自体の意味はあまり注目されてこなかった。問題の記述が断片的である以上、それも当然ではあるが、本発表では親房の歴史叙述全体の中に祭政一致説を位置づけることにより、それが元来有していた意義について一つの解釈を提示したい。

親房の『正統記』等の歴史叙述の主眼は、皇統の無窮と南朝の正統性を主張する点にあった。他方で、親房の歴史叙述には道徳を中心とする儒教的歴史観としての側面もあり、前者の歴史観と複雑に絡み合っている。こうした親房の歴史観において